

注解『七十一番職人歌合』稿(二十五)

下 房 俊 一

凡 例

一、本稿には、『七十一番職人歌合』の中、第五十三番および第五十四番の注解を収めた。

五十三番 葛籠造 皮籠造

【職人尽】

〔調度歌合〕八番右 つづら 人目のみしげきみ山を分けわびて行き来休まぬつづら折かな ……右も、しげき深山の青つづら苦しき世をぞ思ひわづらふ、といひし本歌の心とり過ぎ侍れど、これも又、やさしくもつづら折を、行きなやむ恋路にひきなされたるもいと哀れに、左の杉のしるしよりは、猶、行き来休まぬ青つづら、おのおの心引き侍りし。

〔吾吟我集〕 寄葛籠恋 是にあひかれにあひぬる人はただ一荷つづらのふた心かな 〔人倫訓蒙図彙〕 葛籠師 下地は近江、若狭、薩摩より造り出だす。室町通一条の上にて是を造る。

〔誹諧職人尽〕 つづら作り 解きにくきつづらは春の日影哉へ休甫▽ 葉桜や過ぎ来し伊達のつづら笠へ一尺▽ 散るや桃葛籠に足駄なみだ雨へ不尺▽ 細元手繰りてや秋のつづら町へ丈国▽ ゆくとくとと君がつづらやはるの宵へ寥和▽ / かはご作り 新決のはりま鹿兒島誰が家

へ専吟▽ 刺るとはや皮籠に溜る秋の暮れへ水馬▽ 对于王がもぬけのかはこ今も蝉へ何江▽ 虫干に皮籠もあるか国
 分寺へ万廻▽ 峰入の笠もかはこもそげそげしへ寥和▽ 『今様職人尽百人一首』つゞら師 洪や引く紙張りきかす竹
 皮籠つや塗りなくば水はぢくとは 「これは下谷へ行くのか」「ああ、下谷のあつらいだ」「これは漆がうけまい。洪が
 かいない」 『職人尽発句合』四十番左 葛籠編 如月は嫁入り多しつゞらあみ 如月の春もせはしき葛籠あみに、箒
 ゆひも同じさまながら、……よそめなき哀れきは、右の方深かるべし。 『職人尽狂歌合』左 寄つゞら造恋 かひな
 しや造るつゞらのふた夜三夜思ひのたけをわりくどけども 左、すべて子細にたくまれたり。……いささか左まさるべ
 くや。「此の万年つゞら、いづこの姫の君の御れうにか」 / 左 寄皮籠はり恋 送りたる文をも反古に取り混せて
 皮籠に張りの強き仇人 左、詞つづき、やすらかにおかし。……左勝にて侍らん。 / 左 寄皮籠造恋 起請さへい
 つか皮籠の反古にして憎や二枚の君がした張り 左、皮籠二枚のした張り、うるはしきつくりざまなり。……右勝つ
 べくや。 『今様職人尽歌合』つゞらはり 玉章の反故につゞらを張りしより恋の重荷をいつか背負ひつ 左、我が文
 ながら捨てておかれず、反故を集めて張りつゞら、重荷と成しもよろし。但し、結句、一荷背負ひつといふ言葉、奉公
 人の宿ならずは、饅頭屋の男めきて、つゞらはりとは聞こえぬやうなり。……此の番ひ同等ながら、鼈甲造りの方、耳
 掻きの先ほど光りまさりぬべし。「弥生一日ころは、宮仕へ人の出入りし給へば、あきものことにあまた候」 /
 割りくどく心のたけを反故にして憎やつゞらの張り強き君 左右、家業不出精と大家から尻の来る時、言ひ訳は一つ筋
 なるべし。 / 立つ浮名いかにかせまし目の多き籠の外は張り包めども 左右、つゞら張子、鼈甲細工、工面よげ
 なる店つきにて、店卸しの高も等しかるべし。 / 思ひ出す恋には年をふるつゞらはるか過ぎにし文を集めて /
 約束も反古張りにて上下の合はぬをうしと嘆く葛籠師 / 今身身の古きつゞらの老いばれて竹の骨まで出でて見えけり

【本文】

五十三番

四十九るてん屋に見ゆるうりつゞら

見ゆる一「類」みゆる

さしいてはめるのきの月影

月見つゝいたつらふしのなきまゝに

夜のほとつくる竹かはこかな

左、風情尽てきこゆ。見くるし。右は、ふし、

よなど、竹かはこによせあり。すこしま

さるへくや。

我恋はまたさらされぬあをつゝら

くるとはすれとさねしよそなき

あふ事のしゆくせぬかきのさねかはこ

しふ／＼にたに人のこぬかな

左の哥、つゝらにさねといふ物侍るやらむ、

いまた分明ならず。右、しゆくといふことは

こはけれど、かきのさねかはこ、しゆくしなど、

縁のこと葉にや。さねの事聞きためん

ほと、まつ為右勝。

◇

◇

つゝらつくり

茶つゝらも候。

かはせ給へ。

かはこつくり

さしいてー〔類〕さし出 のきー〔類〕軒

夜のほとつくるー〔類〕よの程造る かなー〔類〕哉

きこゆー〔類〕聞ゆ

あをつゝらー〔類〕青つゝら

あふー〔類〕逢 かきー〔類〕柿

侍るやらむー〔類〕侍るや覽

いまたー〔類〕未 しゆくといふことはー〔類〕熟といふ詞

かきー〔類〕柿 しゆくしー〔類〕熟し

こと葉ー〔類〕言葉 事ー〔類〕こと

まつー〔類〕先

つゝらつくりー〔白〕葛籠造〔忠〕五十三番つゝらつくり葛籠造〔類〕葛籠造

かはこつくりー〔白〕〔類〕皮籠造〔忠〕皮籠造かはこつくり

かはこつくりー〔白〕〔類〕皮籠造〔忠〕皮籠造かはこつくり

このかはこは、
人のあつ
らい物
にて候。



このかはこは、人のあつらい物にて候。「白」ナシ
あつらい物。「尊」「忠」「明」「類」あつらへ物

【語注】

◎葛籠は、本来、葛藤の蔓を編んで作ったが、『貞丈雑記』八・調度之部によると、「今は、つづら藤にて作りたるは少し。竹籠を紙にてはり、又は、檜の木の薄板にて作り紙にて張たるも多し」という。本職人歌合の絵に見える葛籠も、薄板に紙を張ったものか。

皮籠は、本来は、革を張った蓋付きの籠を言ったが、後には、竹を網代に編んだ竹皮籠や、その上に紙を張って渋を引いた渋皮籠をも言うようになった（国史大辞典「革篋」の項・日本職人辞典「皮籠造」の項）。本職人歌合の月の歌は竹皮籠を詠み、恋の歌は渋皮籠の類を詠んでいるようである。絵に見えるのは竹皮籠か。

なお、右のような事情で、近世には、両者の区別が曖昧になっていたかもしれない。（『今様職人尽百人一首』のつづら師の歌は、竹皮籠を詠み込んでいる。）

◎四十九ゐ 近江国犬上郡四十九院（現滋賀県犬上郡豊郷町）か。中世には中山道の要地で（角川日本地名大辞典 滋賀県「四十九院」の項）、応永ごろ市が成立した（滋賀県の地名「四十九院」の項）という。同じ中山道沿いに、葛籠の生産によって名付けられたという葛籠町や、『和漢三才図会』三十二に、「出於江州高宮少出之、経緯用純藤之故剛靱而佳」（「葛籠」の項）と見える高宮がある。なお、『日本職人辞典』（「葛籠造」の項）、『新大系』付録に、「始終食ひ」を掛ける、とするのは納得できない。

◎てん屋 「店屋」で、物を売る店のこと。勿論、俗語。

◎うりつゝら 「売り葛籠」で、誂え物ではない、不特定の人に売る葛籠、の意であろう（十七番語注「しは

すのはてのうりひきれ」の項参照。

◎さしいてはめるのきの月影 未考。夜にもかかわらず、月影が明るいので、作りかけの売り葛籠のある所まで差し出て嵌める、というのか。「嵌める」は、薄板などを嵌め込んで葛籠を作ることをいうか。そうだとすれば、「嵌むる」の口語的表現。いずれにしても、雅語ではない。また、「差し」に月影が射す意の「射し」を掛けるか。

◎いたづらふしのなきまゝに 「いたづら臥し」は、和歌の用例は多くはないが、「いかなりし時くれ竹のひと夜だにいたづら臥しを苦しといふらん人不知」(拾遺集、十三、恋三)、「恋ひ恋ひて待ちみるかひもなよ竹のいたづら臥しに明けぬこのよは光厳院」(新千載集、十三、恋歌三)のように、恋の歌で、恋しい人と共寝できずにむなしく一人寝ること、の意で用いられるのが普通である。しかし、ここでは、なすべきことをしないで眠りをむさぼること、の意で用いている。この意味の「いたづら臥し」は、「昼の次第、女房のさのみいたづら臥しに待るは、まさなきわざになん」(『身のかたみ』十二)など、散文に用例が見られる。すなわち、ここは、「雅語」を、あえて俗語としての意味で用いることで、滑稽感を出しているのである。加えて、ここでは、この「いたづら臥し」に、無駄な竹の節の意の「いたづら節」という造語を掛けていると思われる。伝統的な和歌でも、上にも見るように、「臥し」を「節」に掛けること自体は普通の技法であるが、このような造語は、勿論、用いられない。無駄な節がないので(仕事がはかどって)、無駄に寝ないで。

◎夜のほと 夜の間中ずっと。「夜」に竹の縁語「節」を掛ける。

◎竹かはこ 皮で作った本来の皮籠に対して、竹を編んで作った皮籠をいう。

◎風情尽てきこゆ 「風情尽く」は、趣向の目新しさを求めて奇抜に走ること(二十四番語注「風情つきて聞ゆ」の項参照)。ここは、「四十九院」、「店屋」という字音語を用いたことなどについて言うのであろう。

◎見くるし 歌合判詞に用いられた例に、「此題ことの一の左は、すべて見くるしき体にこそ侍れ」(石清水若宮歌合、十一番判詞)などがある。

◎ふし、よなど、竹かはこによせあり 「寄せ」は、歌論用語で、ある事柄に関連する言葉。縁語など。「節」^{せつ}、「節」^{せつ}など、「竹皮籠」の縁語をうまく用いている、というのである。

◎我恋は…… 「我が恋は……」という形式は、恋の歌の典型の一（五番語注「わが恋は」の項参照）。

◎またさらされぬあをつら 「青葛」は、葛籠の材料である葛藤のこと。ただし、『日葡辞書』は、^{きづた}木葛に似ている一種の草であつて、それが緑色をしている時をいう（「Autofuzura」の項）とする。「またさらされぬ」については、『日本職人辞典』に、「刈取つてから水に晒して表皮を取り除く作業を経ねば使えない」（「葛籠造」の項）という。全体で、相手が世馴れしていないことを暗示するか。「青葛」は、糸のように「繰る」ことができることから、「なき名のみたつたの山のおをつづら又くる人も見えぬ所にへよみ人しらず」（拾遺集十二、恋二）のように、「来る」、「苦し」などを引き出す序詞として用いられる。こも下の「くる」に続く。◎くるとはすれとさねしよそなき 「く」と（は）すれど」は、くすることはするけれど、の意。上接語が動詞などの場合、終止形を取るのが普通であるが、「来」、「経」など、終止形が一音節の動詞は、「かづきするあまのむすべるたくなはの来る（「繰る」と掛詞）とはすれどとけぬきみかなへ頼政」（続後撰集十三、恋歌三）のように、連体形を取る。「さ寝」は「寝」の雅語。男女が共寝する意に用いることが多い。青葛を「繰る」ように、相手が「来る」ことは来てくれるが、共寝した夜はない。なお、判詞にいうとおり、「さね」に「葛籠（葛）」の縁語を掛けるかとも思われるが、この点、未考。

◎あふ事のしゆくせぬ 「熟す」は、果物などがうれること。また、ものが熟成すること。こは、逢う機が熟せぬの意か。ただし、「熟す」をそのような意に用いた例は、管見に入らない。また、「熟す」という言葉自体、勿論、歌に用いるべき言葉ではない。こは、「熟せぬ柿」と続けるために、あえて不自然な言葉を用いたのである。

◎かきのさねかはこ 「柿の核」（柿の種）から、「さね皮籠」と続けるか。「さね皮籠」は、未考。柿の渋を用いた皮籠で、渋皮籠の類か。また、「さね」に「さ寝」を掛けるか。

◎しふく／＼にたに人のこぬかな 「しぶしぶ」の「しぶ」に柿の「渋」を掛ける。ただし、「しぶしぶ」という語は、勿論、俗語。たとえ不承不承であってもあの人が来てくれれば嬉しいが、それさえもない、というのである。

◎つゝらにさねといふ物侍るやらむ、いまた分明ならず 「葛籠(葛)」に「さね」というものがあって、それを掛けて「さ寝し」といったのかと思われるが、はっきりとは分からない、というのである。

◎しゆくといふことはこはけれど 「こはし」は、歌論用語で、表現が粗野で優美さに欠けること。「熟」という字音語が、歌にふさわしくないことをいう。

◎縁のこと葉 縁語。

◎さねの事聞さためんほと、まつ為右勝 「聞き定む」は、人に聞いて確かめること。先に「葛籠(葛)」にさねといふ物侍るやらむ、いまだ分明ならず」と言ったのを受けて、「さね」という言葉がはっきり分かるまでは、とりあえず右の勝としておこう、というのである。

◎茶つゝら 未考。『中世職人語彙の研究』に、「茶葛籠とは、要するに茶を入れるため湿気防ぎの張紙などをした小さな葛籠のことであろう」(「茶つづら」の項)とし、『新大系』に、「茶葛一、予物、四条坊門富少路土倉ニ妙阿並ア子女ニテ六貫文質ニ置之」(八坂神社記録・康永二年七月二十五日)の用例を引く。

◎このかはこは、人のあつらい物にて候 白石本は、この言葉を取する。「あつらい物」は、尊経閣本、忠寄本、明暦板本、類従本は「あつらへ物」。「あつらひ物」は、「あつらへ物」の転。特に注文して作らせる品。

〔絵〕

葛籠造は、剃髪し、小袖、袴姿で、手に葛籠を持つ。前に大小の葛籠二つ。葛籠はいずれも、表面に模様があり、薄板に紙を張った物かと思われる。類従本は葛籠の模様は描かない。

皮籠造は、無帽で髪を束ね、小袖、袴姿で、皮籠に手を添える。皮籠は竹皮籠か。

五十四番 矢細工 箆細工

【職人尽】

【古今夷曲集】

職人歌合の中に、矢師恋 かりそめに思ひそめばの矢の竹のよよにし君をためつすがめつハよしたか

▽ 【訓蒙函囊】

矢人しんや、やさいく、【誹諧職人尽】 矢細工 年の矢を請けてお見やれ螢火丸ハ白雲▽ 沾洲点、羅浮印譜

最初の句 前句 十六夜の旦は袖も酒見き 早稲はして取る流鏑馬の端矢ハ咫尺齋▽ 猪は来ず年の矢はぎの持哉ハ水

戸 低哉▽ 矢ともなり手とも成りたる案山子哉ハ沾涼▽ 征矢作れ雁は八百鹿の声ハ五啓▽ 楊弓の矢の秤目や春の

暇ハ寥和▽ 箆細工 梅咲くや多びら細工の窓あかりハ水戸 歩月▽ 壺宝も梅に貸さずや古ゑびらハ寥和▽

【職人尽発句合】

十八番右 矢師 夏の夜の明くるは早し箭のごとく 右も左りも早き事を自負したるはことほりにこ

そ。かの鋒と楯との争ひはげにさることも有るべけれど、弓矢は体用一なるからに、いづれ勝劣をいふべからず。

【本文】

五十四番

なかむとて我さへ目をそひねりぬる

のためかたなるあり明の月

ねやのうちにまくらかたふけなかわれは

さかつらにこそ月もみえけれ

左右、非無興。左勝へきを、在明は月の

目―【類】め

なる―【類】成 あり明―【類】在明

まくら―【類】枕

非無興―【忠】無興

哥に心なきにゝたり。仍為持。

のこゝろもさらにかはらてひとて矢の

おなしふしにはいつかなれまし

ひと心うけ緒かけをもきれはてゝ

こしはなれたるふるゑひらかな

右、猶たくみ也。仍為勝。

◇

◇

矢さいく

これは、ちくの

とて、あつらへ

られて候。

ゑひらさいく



【語注】

◎矢細工・箠細工は、それぞれ、矢・箠を作る職人。

箠は、矢を差し入れて腰に着けて携帯する道具。

◎我さへ目をそひねりぬる 「目を捻る」は、用例は管見に入らぬが、矢柄の歪みを見出すときなどに、片目を物を凝視することをいうのであろう（『職人尽発句合』十八番右、矢師の絵に、その様子を描く）。勿論、俗

さらに「類」更にひとて矢「類」一手矢

ひと心「類」人心 かけを「類」かけ緒

こし「類」腰 ふるゑひらかな「類」古えひら哉

也「類」なり

也「類」なり

矢さいく「白」【類】矢細工【忠】 矢細工

五十四番

ちくの「白」【忠】ちく野

あつらへ「白」【忠】詔

ゑひらさいく「白」【類】箠細工【忠】箠細工

（画中詞）「尊」「明」「類」さかつらかなくて、柳ゑひら

にする【白】【忠】さかつらかなくて、柳箠にする

語。矢柄を捻つて歪みを正すように、つい自分自身も目を捻る、という洒落であろう。

◎のためかたなるあり明の月 『武器考証』十一・職人尺歌合抜書に、「按、ノタメハ、矢ノ曲リヲタメ直ス物也。スヂカヒニキザミメヲ付テ、其所ニ篋ヲ入テタメル也。サレバ、スヂカヒナルヲ、ノタメカタト云」とあり、『日本職人辞典』はこれを引いて、「有明の月が篋撓形（すじかいの形）をしている」（「矢細工」の項）とする。『新大系』も、同じく『武器考証』を引いて、「斜めによじれた形をしている夜明けの月」と解するが、「すじかいの形」ないし「斜めによじれた形」の月とは、どんな月であろうか。「篋撓形」の語は、『平家物語』九・宇治川先陣に、「佐々木四郎は名馬いけずきに乗つて）宇治河はやしといへども、一文字にぎつとわたひて、むかへの岸にうちあがる。梶原が乗つたりけるするすみは、河なかよりのためかたにおしなされて、はるかのしもよりうちあげたり」（新日本古典文学大系）という例があり、この「篋撓形」について、従来、次の二種の説が行われている。一つは、前掲の解と同じで、「篋撓」を篋（矢柄）の歪みを撓める道具（矯木）と解し、「篋撓形」はその形、すなわち、「すじかい」、「斜め」とする説（日本古典全書『平家物語』・富倉徳次郎『平家物語全注釈』など）。いま一つは、「篋撓形」を、篋を撓め直す時の、篋そのものの形と解し、すなわち、「弧形の曲線」とする説（佐々木八郎『平家物語講説』・新日本古典文学大系『平家物語』など）。いずれの説もその根拠は明確ではないが、結論だけからいうと、後者の方が妥当であるように思われる。なお、『太平記』十九・奥州国司顕家卿并新田徳寿丸上洛事の、「イツモ軍ノ先ヲ争ヒケル部井十郎・高木三郎、少毛前後ヲ見ツクロハズ、只二騎馬ヲ（利根川に）颯ト打入テ、……篋撓形ニ流ヲセイテゾ渡シケル」の「篋撓形」も、弧形と解するのが自然なように思われる。もし、この弧形説が妥当とするならば、ここは、二十七・八日ころの「有明の月」を詠んだものとして、納得しやすい。

◎まくらかたふけ 「枕（を）傾く」は、枕をして寝ること。

◎さかつらにこそ月もみえけれ 「逆類」は、逆類箴のこと。逆類箴は、ほうだて方立（矢の根をさす箱の部分）に、猪などの毛皮を、毛並みが背面は下向き、他の三面は上向きになるように張った箴。室町時代のころは、これ

を式正の箠とした(国史大辞典「箠」の項)。こゝは、その「逆類」を形容動詞化して、逆さまに、の意で用いた。寝て見ると、月も逆さまに見える、という屁理屈。

◎非無興 忠寄本は、「無興」と「非」を脱するが、誤脱であろう。「興」は、歌論用語で、歌の趣向のこと(三十二番語注「興なきにあらず」の項参照)。おもしろい趣向がないでもない。左歌の「我さへ目をそひねりぬる」、右歌の「さかつらにこそ月もみえけれ」などの表現についていうのであろう。

◎在明は月の哥に心なきにたり 「ありあけの月は、あはれに心ほそきすちにこそ詠むめれ、歌合の月の題にはいかがあるべからむ」(永縁奈良房歌合、月、二番判詞)のように、歌合の月の歌は、月の盛りを詠むべきであつて、「在明の月」などは避けるべきものとされていた(一番語注「哥合にはかたふく月あやなくきこゆ」の項参照)。「心なし」は、題意に対する理解がないこと(九番語注「哥合にいりかたとよめる、いさゝか心なきに似たれども」の項参照)。

◎のこゝろもさらにかはらてひとて矢の 「のこゝろ」は、「篋心」で、篋の調子、使い具合をいうのである。その「心」に、人の「心」を掛ける。「一手矢」は、同寸法の矢柄に、同じ鳥の羽の矢羽を付けた一対の矢。もっとも一般的な三立羽(三本羽)の矢は、鳥の羽三枚を真ん中から裂いて六枚とし、同時に一対を作つた。一方を甲矢、他方を乙矢といひ、射芸の場合、甲矢、乙矢の順で射るのを例とした。篋心も全く変わらぬ一手矢のように、の意で序詞的に下旬に係る。

◎おなしふしにはいつかなれまし 一手矢は同じ位置に節がある。その「同じ節」に「同じ臥し」を掛け、男女が共寝することをいう。いつになつたら、あの人と共寝するまでに馴れ親しむことができるのであろうか。

◎ひと心うけ緒かけを 「人心憂(し)」から「受緒」と続ける。「受緒」、「懸緒」は、箠の紐で、箠を身につけると、腰に巻いて両者を結ぶ。

◎こしはなれたるふるゑひらかな 未考。単に、離れて行く恋人を、腰に着けることのできない古箠に譬えた表現か。あるいは、「腰離る」の語自体にそのような比喩的な意味があつたかとも想像されるが、しかるべき

用例は管見に入らない。

○ちくの 竹久篋。信濃国伊那郡知久地方産の篠竹で作った矢柄。『貞丈雜記』十・弓矢之部に、「ちく篋の事……中学集に註云、うきすはねをきらふ物なれば、好みに依るとなり。古よりうきすの名物と云、佐渡篋也。又、信州知久の一かまと云を用る也。され共、かたうきすに徳多き也。或匠云、……ゆきすハ篠竹ヨリ出ル、今ハ山田ニ、知久ト云ハ、信濃國ノ地ナリ。名地、知久ト云所アリ。昔、箱ハ小笠原縣ノ領地也シユ、知久、逆ヲ用テシナリ。とある。

○あつらへられて候 既製品として売る品ではなく、注文を受けて作る品だといふのである。

○ゑひらさいく 底本にはないが、諸本、「さかつらかなくて、柳ゑひら（箆）にする」と、画中詞がある。「逆類」は、ここは、逆類箆の材料としての毛皮。「柳箆」は、柳を箱形に編んで方立にした、略式の箆。

〔絵〕

矢細工は、烏帽子、直垂、袴姿で、腰刀を差し、左手に矯木を持ち、右手の矢柄を矯めているところ。前に、矢柄を柔らかにするための火鉢。右に、羽数枚。左に、矢柄数本。

箆細工は、剃髪し、直垂、袴姿で、片肌を脱いで、箆を作るところ。前に、箆の緒二本。箆は、尊経閣本等の画中詞にあるごとく、柳箆か。

〔参考〕

- 影白き月や雲をもさらすらん
のたけはいづれ矢をはぎが花
△周阿△
(紫野千句、七)
- われらの矢は木製である。彼らのはやはり竹製である。
(日本覚書、七)